

本の中のサツマイモ

元・川越サツマイモ資料館 館長

いのうえ ひろし
井上 浩

はじめに

サツマイモがわが国に伝来したのは江戸時代の初めであった。まだ400年余の歴史しかないが、それが果たした功績はとてつもなく大きい。それだけに諸書に、サツマイモについてのさまざまな記述がたくさんある。その中から、サツマイモの文化史上で特に重要と思われるもののいくつかを紹介させてもらうことにする。

『野國總管甘藷伝来400年祭記念誌』

～ベールに包まれたサツマイモの始祖

サツマイモの原産地は中南米の熱帯地方とされている。それが世界に広く伝わるようになったのは、コロンブスがアメリカに到達した1492年以後のことである。

そのサツマイモが中国南部に入ったのは、それから100年ほど後のことであった。「蕃藷」と呼ばれたそれは大歓迎で、たちまち中国南部一帯に広がった。それが、それからいくらかたない1605年に、沖縄本島の野国村(嘉手納町)に入った。2005(平成17)年はそれから400年になるということで、沖縄県だけでなく、鹿児島県指宿市や埼玉県川越市などでも盛大な記念行事がおこなわれた。

サツマイモは強い作物でどんな痩せ地でも良くできた。台風や早魃、病虫害などに

も強く、食べてみれば、甘くておいしいし、穀物の代わりにもなった。農民にとって良いことづくめのものであったから、沖縄でも大歓迎となった。

そのようなありがたい作物を渡航先の中国で初めて知り、これは沖縄の者にとっても無くてはならないものになるぞと直感した人がいた。それは野国村の人で、農民身分でありながら大変な努力を重ね、進貢船の事務長である「總管」にまで出世した人であった。

当時の沖縄は琉球王が治めていた。そこは中国への進貢国で、2年に1度ぐらいの割合で進貢船を出していた。同船は中国皇帝への貢物を積み、那覇から福建省の福州港に入った。1604年に出航し、翌1605年に帰国した進貢船の總管は、サツマイモの苗を鉢植えにして持ち帰り、郷里の野国村で試作を開始した。

当時の琉球王府の田地奉行は、儀間眞常ぎま じん じょうであった。沖縄も中国南部と同様に、台風や夏の早魃による飢饉の多いところであった。眞常はそれを何とかしなければならぬと常に考えていた。だから野国村でサツマイモの試作が始まったことを知るとそこへ行き、苗を分けてもらった。それを使い、自ら自分の畑での試作を繰り返した。それでまず納得のいく合理的な栽培方法を

確立した。それから苗を農民に配り、栽培を奨励したことにより、サツマイモ栽培が一気に盛んになり、そして住民にとっての主食にまでなったのである。

それだけにその始祖の町、嘉手納町での400年祭は盛大に行われ、その記念行事の一つとして、500頁もの『甘藷伝来400年誌』を世に出したのである。2006年に刊行された同書の編纂部会長は歴史の研究者であり、嘉手納町の元・教育長でもあった伊波勝雄先生であった。先生はこの絶好の機会に、わが国のサツマイモの始祖の本名や生涯のことなどを明らかにしたいとされた。だが、「いも大主」と呼ばれ、沖縄の三大恩人の一人にもされているほどの人でありながら、それはやはりかなわなかったのである。

野國總管による甘藷伝来400年祭を機に、有志による「沖縄いもづるの会」が結成された。同会事務局は沖縄県読谷村渡具知128-3 石川 護方にある。その会誌「いもで一びる」の最新号・第31号（2017・6・2）に、伊波先生の論文「甘藷の始祖・野國總管」がある。

その最初の項が「パールに包まれた野國總管」で、こうある。「野國總管は野國村出身で中国から甘藷を持ち帰り、その普及を図り、多くの人びとを餓死から救った人物として知られてきた」。それにもかかわらずとして、こうある。「偉業を成し遂げた人物にしては不明な部分が多く、生没年及び正式な姓名さえ知らないまま今日に至っている」「肝心な野國總管の人物像や生涯、影響力などについての詳しいことはほとんどわかっていない」。

九州以北には、サツマイモの功用を知り、

それをいち早く郷里の村々に伝えて普及を図った先覚者の事蹟をこまごまと記述したものがたくさんある。それなのに、わが国のサツマイモの始祖のことは、出身地と進貢船の事務長という職名しか伝わっていないのはなぜなのであろう。その本名さえ、いまだにわからないのだという。

もっとも沖縄には、始祖の功績を讃えたり、感謝の気持ちを表わした碑文や書物ならいくらかもある。それらからわかる人物像は、国際性、進取の気性、そして社会貢献の精神に満ち満ちていた人であったということである。伊波先生は、今となつての大事なことは、それを学び、その遺徳を継承することであるとされている。

宮崎安貞の『農業全書』

～元禄期ごろの長崎の種イモ事情

中国南部から沖縄に入ったサツマイモの普及は早かった。そこは飢饉の多発地であったことと、琉球王府の田地奉行、儀間眞常がその普及に全力を投入したからであった。沖縄に定着したサツマイモはくり返し九州各地に伝えられたが、そこでの普及はなかなか進まなかった。なぜか？

江戸時代は石高制社会であったから、どこの領主も米の増産や、その年貢率の引き上げに熱心であった。だが、年貢の対象にはなりそうもないサツマイモには関心がなかったようである。また、農民の側にも作り慣れないものには手を出したくないという傾向があったようである。

ところが江戸時代中期の享保期（1716～36）以降になると、大小の飢饉が頻発し、サツマイモに頼らざるをえなくなってきた。1688（元禄元）年刊の『農業全書』の

「蕃藷」の項には、そのような危機が迫りつつあることを見据えての、サツマイモについてのさまざまな記述がある。

宮崎安貞は北九州の福岡藩の藩士であったが途中で農耕のことの研究に没頭するために暇をもらった。それからは福岡での農耕生活を送りながら、近畿以西各地の篤農を訪ねた。同時に中国-明の徐光啓著『農政全書』（1639<寛永16>年刊）にならい、わが国で最初の体系的農書になった『農業全書』の執筆を進めた。同書に、九州でもようやく注目されだしたサツマイモのことがある。農文協の日本農書全集所収『農業全書』の現代語訳文により、それを紹介したい。

「蕃藷（甘藷）。薩摩や長崎では甘藷を琉球芋、または赤芋といって多く作っているようだが、まだわが国では全国に行き渡っていない」「甘藷は肥培管理をよくすれば、湿害以外の災害はだいたいのがれることができるから、思いのほか利益の多いものである。甘藷を上手に栽培したら飢えしらずだ、と中国の人はことのほか褒めてかいている」などとある。

その上でこう結んでいる。「甘藷は、薩摩、長崎あたりでは、先年から多く栽培されている」「甘藷はまだ各地には種藷がないけれども、長崎にはたくさんあるから、容器に入れてよく準備して取り寄せれば、日数がたってもいたむものではない。便宜があれば、春のころ、長崎から求めて作るとよい」（379～390頁）。

わが国のサツマイモ伝播史では、薩摩の国から其の外へ種イモを持ち出すことの難しさを強調する話が多い。薩摩藩が領内に入ってくるよそ者の検問を厳しくしていた

ことは事実である。そこから薩摩のサツマイモを領外に持ち出すことも厳禁であったとする話がでたようである。

だが、宮崎安貞の『農業全書』が出た頃には、種イモはそこまで行かなくても、長崎でかんたんに入手できるようになっていたようである。

『有徳院殿御実紀附録巻十七』

～徳川吉宗と青木昆陽

1732（享保17）年、ウンカの異常大発生により中国・四国・九州のイネなどの作物が全滅状態になり、大飢饉になった。「享保の大飢饉」がそれで、多くの餓死者が出た。だが、そのころになり、ようやくサツマイモ栽培が盛んになってきた薩摩藩内と長崎地方では、一人の餓死者も出さずに済んだ。ときの将軍は8代将軍・徳川吉宗で、その諡は「有徳院殿」であった。その実紀に当時の将軍のサツマイモへの関わり方がこうある。

「青木文蔵敦書も甘藷考など書て進らす。そのころ長崎の鉄工、平野良右衛門といへるもの江戸に來りしが。彼培法に精しきよし。新兵衛より薦挙せしかば。文蔵。良右衛門して。吹上の御庭にてつくらしめ給ひしに。これも年をへて繁殖しければ。それより近国の代官におほせ。温暖の地をえらびうへさせ給ひしに。いくほどなく上総。下総のあたり。これをつくるものおほくなりて。江戸にも常にもち來たりてこれをひさぎ。のちは日用の食となりし事。ひとへに御仁慈の御心。天意にかなはせ給ひしものなるべし」（國史大系刊行会『新訂増補國史体系第46巻 徳川実紀第9篇』<1934年> 316～7頁）。

享保の大飢饉におどろいた吉宗は、ひざ元の関東でもサツマイモを作らせたいと思った。そのときタイミングよく現われたのが江戸で儒学の私塾を開いていた青木昆陽であった。

昆陽は、江戸の町奉行でありながら関東の農政も兼務していた大岡越前守忠相に認められ、1733（享保18）年、「蕃語考」を将軍吉宗に献ずることができた。

それは中国の『農政全書』などに拠りながら、サツマイモの特性や効用などを挙げ、その普及を急務とするものであった。吉宗はそれに目を通して喜び、昆陽に関東での試作を命じることにした。だが、農耕の

実際の経験がない学者に、いきなりそれをさせるようなことはしなかった。そのような配慮がまずあったことが上掲文からよくわかる。

1734（享保19）年、吉宗は近臣の深見新兵衛から、たまたま江戸に出てきていた長崎の者の話を聞き、その者と昆陽を組ませ、二人で一緒に、それも江戸城内でまず試作させている。それが成功し、関東でもサツマイモを作れることを確認してから、その翌年の1735（享保20）年、今度は昆陽単独による、江戸などでの試作を命じたことがわかる。

□寄稿のお願い□

一般財団法人いも類振興会では、サツマイモ、ジャガイモなどいも類の振興と消費拡大を図る一助として、「いも類振興情報」（季刊）を発行しています。いも類に関する総説、調査・研究解説、産地情報、海外情報、商品情報、料理・文化などの寄稿をお願いします。原稿の執筆要領は、下記のとおりです。

1. 原稿はパソコンのワープロ・ソフトを用いて作成し、E-mailの添付ファイルで送付下さい。なお、手書き原稿でもかまいません。
2. 編集の都合上、OSはWindows、使用ソフトは次のものを使用下さい。
本文はWord（一太郎、テキストも可）。図表などはWord、Excel、PowerPoint。
3. 掲載1回分の頁数（1頁で約1,200字）は、図表・写真を含めて概ね6頁以内となります。
4. 編集の都合上、原稿の一部を割愛、修正する場合がありますので、予めご了承下さい。掲載原稿には、規定の原稿料と掲載誌を若干部お送りします。
5. 原稿の送付先

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303 一般財団法人 いも類振興会
E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp TEL: 03-3588-1040 FAX: 03-3588-1225